

## 弥生時代集落の理解に向けた一視点

### －掘立柱建物集成から見えてくること－

谷口 武範  
(宮崎県埋蔵文化財センター)

#### 1 はじめに

弥生時代の掘立柱建物は、1991年の「弥生時代の掘立柱建物」をテーマにした研究集会において全国の情報が集成され、宮崎県も3遺跡8棟があげられている（埋蔵文化財研究会 1991）。その後、多くの発掘調査が行われ、県内でも弥生時代の掘立柱建物が散見されるものの、県内の状況がよくわからない<sup>(1)</sup>。そこで、宮崎県でこれまで刊行された報告書から弥生時代の掘立柱建物と考えられているものを抽出・集成<sup>(2)</sup>し、平面形式や規模など基礎的情報を整理し、その特徴を明らかにする。

なお、本稿作成において、宮本長二郎（宮本 1996）、岸本道昭（岸本 1998）、設楽博己（設楽 2009）、山下優介（山下 2015）の論考から、資料のデータ分析や掘立柱建物や集落の検討において、多くを学ばせていただいた。

#### 2 宮崎県内の弥生時代掘立柱建物の様相

##### (1) 集成（表1）

宮崎県内で刊行されている報告書や研究会資料等を参考に集成を行った。その結果、北は川南町から南は都城市まで26遺跡81棟を確認した。その分布は、宮崎市と都城市に集中するが、それは発掘調査件数に比例していると考えられる。さらに、弥生時代の掘立柱建物の可能性があるものの報告書で時期不明とされ、集成に記載していない遺跡も多く、宮崎市田野町の高野原遺跡（B・C区）では、弥生時代竪穴建物14軒とともに、梁行3間12棟を含む多くの掘立柱建物が確認され（田野町教育委員会 2003）、えびの市の広畑遺跡では、弥生時代竪穴建物に隣接して梁行3間で棟持柱を有する建物がみられる（えびの市教育委員会 1991）など、各地域に弥生時代の掘立柱建物が存在しているのではないかと想定される。

今回の集成には、所在地、調査面積、立地、標高、確認された弥生時代の遺構・遺物の時期および検出遺構、判明している掘立柱建物の時期（掘立柱建物の時期を記述していないものは、弥生時代の遺構・遺物の時期をそのままを記載）、棟持柱の有無、規模（桁行・梁行）、面積、梁行のラインから棟持柱の張り出しの長さ、棟持柱間の長さ、柱穴間距離、柱穴径、深さ、出土遺物、備考、掘立柱建物の配置関係の順に記述している。これらの項目については、報告書に記載されているものを引用し、記載のない柱穴の規模や柱間距離、面積などは報告書の実測図より計測した。なお、柱穴間距離は柱穴の中央で測り、面積については不正な方形を呈するものが多く、長い方の桁行・梁行の数値を用い算出している。

##### (2) 弥生時代全体の状況

建物の平面形式が判明しているのは、24遺跡72棟で、現在のところ中期後半に出現し、古墳時代へと続くようである。その全体の面積および桁行と梁行の規模を示した（表2・3・4）。面積で見ると5m<sup>2</sup>以下のものから25m<sup>2</sup>を超えるものまであり、多くは10～20m<sup>2</sup>あたりに集中している。最

表1 弥生時代の掘立柱建物一覧 (1)

建物 番号	道路名	所在地	調査面積	立地	標高	遺跡内容（弥生～古墳時代）						掘立柱建物						文獻								
						遺構用語	壁	柱	土坑	溝状遺構	周壁	その他の 遺跡用語	周開	遺構	標柱柱	規規（桁行×梁行）	面積	標柱張り出し（標柱間隔×柱行間隔）	柱行間隔	深さ	出土物	備考				
48	18 中・五郎2遺	都城市大谷町	6,000	段丘	140	後期後半	6	1	3		1	後期後半	SB2	○	周開:1.8m (5.6m×3.3m×3.68m)	20.6	0.5/0.6	3.2	1.6~1.9	3.3~3.68	0.20~0.23	0.1~0.2				
49	19 上大五郎遺	都城市大谷町	12,500	段丘	142	中期後半	3				1	中期後半～後期初期 古墳初期	SB3		48~20 (4.6m×4.88m×3.27~3.96m)	14.9		0.8~1.44	1.0~2.27	0.22~0.25	0.1~0.12		柱行間隔と柱在するが、縦穴墓物に隣接	20		
50	20 中田ノ上遺	都城市中町	12,000	馬伏地	156	後期後半～古墳初 頭	9		2		1	終末～古墳初期	SB18		2間×1間 (3.2m×2.5m)			1.0~1.2	2.5	0.2~0.3	0.15~0.15		田園の生六重（馬伏丸）	18		
51												SB1		1間×2面 (3.5m×2.5m)	8.75		3.5	1.0~1.5	0.35~0.45	0.35~0.45			縦穴墓物に隣接、3カ所に分かれて分布	19		
52												SB2		1間×2面 (3.2~3.5m×2.1m)	7.35		3.2~3.5	1.05	0.2~0.4	0.2~0.4			田開穴頭、高床か？	15		
53	21 向原第1遺	都城市中町	5,200	馬伏地	162	中期後半～後期初期	4	6	1	8	3	中期後半～後期初期 古墳初期	SB3	○	2間×1間 (4.0~4.4m×3.5~3.75m)	12.1		1.9~2.5	2.5~2.75	0.35~0.46	0.2~0.8		周開遺構内	17		
54												SC2		2間×1間 (3.75~3.85m×2.25m)	10.5	0.9~1.27	5.35	1.2~2.0	2.5~2.6	0.2~0.3	?	周開遺構内	22			
55												SC4	▲	南北2.3間 (3.5m×2.8m)	9.24	0.4	1.0	0.8~1.0	0.2~0.3	0.1~0.2		周開遺構内				
56	57 22 向原第2遺	都城市中町	2,100	馬伏地	162	終末～古墳初期	4	7	1		3	後期後半～古墳初期	SB1		1間×1間 (3.1m×2.55m)	10.9		3.7	2.95	0.35	0.45~0.55		遺構が柱に隣接あり			
58												SB2	▲	2間×2面 (2.7~2.9m×2.3m)	6.6							田開穴頭、高床か？				
59	23 加治屋B遺	都城市中町	21,000	沖積段丘	152	中期～古墳初期	45	14	2		1	中期後半	YSB1		2間×1間 (3.7m×2.55m)	9.43		1.85	2.55	0.2~0.35	0.15~0.17		縦穴墓物から少し離れる	23		
60	61 24 平田遺跡A地点	都城市中町	14,000	段丘面	150	中期後半～後期初期	18	23	8	7	2	後期後半～古墳初期 古墳初期	SB03	○	3間×3間 (3.4m×2.8m)	11.2	0.8~0.7	4.8	1.2~1.3	0.93	0.2~0.5	0.2	周開遺構と施設	23		
62												SB05	○	4間×3間 (6.62m×4.42m)	26.0	1.1	7.8	1.5	1.4	0.4~0.6	0.5	周開遺構と施設	24			
63	64 25 平田遺跡B地点	都城市中町	6,200	段丘面	148	中期後半～後期初期 後期後半	17					SB08		3間×3間 (4m×2.8m)	11.2		1.4	1.06	0.3~0.4	0.15~0.15	0.05	周開遺構と施設	24			
65												SB09	○	4間×3間 (4.7m×3.5m)	16.45	0.6~0.65	5.8	1.25	0.6	0.2~0.7	0.1~0.4	片白堀	SA33埋設後			
66	66 26 平田遺跡C地点	都城市中町	3,900	段丘	141	中期後半～後期初期 後期後半	5	1	5	不明遺構 自然遺構	3	中期後半	SB10	○	3間×3間 (4.6~4.4m×3.3m)	16.1	0.6~0.6	6.3	0.5~2.7	1.0~1.3	0.2~0.6	0.1~0.4	SA31と29合			23
67												SB21	○	4間×3間 (4.6m×2.9m)	17.94	0.9		1.25	1.4	0.2~0.6	0.2~0.4					
68	68 27 楠木遺	都城市中町	4,000	台地	170	中期後半～後期初期	12	2	4		4	中期後半～後期初期	SB1		1間×1間 (1.3m×0.9m)	0.6			1.3	0.4~0.5	0.1~0.2	0.6	田開穴頭、高床か？	29		
69												SB2		1間×1間 (1.5m×1.3m)	1.9			1.5	1.3	0.12~0.28	0.5~0.59		田開穴頭、高床か？			
70												SB3		1間×1間 (1.0~1.1m×0.9~1.1m)	1.1			1.0~1.1	0.9~1.1	0.1~0.18	0.88~1.16		田開穴頭、高床か？			
71	71 28 仙丈木遺	都城市中町	16,200	台地	176	中期後半	12	6			2	中期後半～後期初期 古墳初期	SB4		2間×1間 (1.2~1.4m×1.5m)	1.4		0.5~0.55	1.0	0.1~0.12	0.36~0.4		縦穴墓物に隣接	28		
72												SB1	○	3間×3間 (3.4m×2.4m)	11.2	0.8		5.08	1.0~1.3	1.77~1.95	0.2~0.3		縦穴墓物に隣接			
73												SB2	○	3間×3間 (3.3m×2.52m)	9.5	0.8~0.9	4.9	0.9~1.3	0.86~1.04	0.3~0.4	0.26~0.44		周開遺構と施設			
74	74 29 岩立遺	都城市中町	9,428	台地	174	中期後半	4	4			4	中期後半	YSB1		1間×1間 (1.8m×1.8m)	3.2		1.8	0.2~0.7	4.1	3.4~3.6	0.2~0.3	0.3~0.7	周開遺構と施設	22	
75												YSB2	○	1間×1間 (3.32m×2.72m)	9.1	0.2~0.7	4.1	2.7~2.8	0.2~0.3	0.3~0.7	0.3~0.7	周開遺構と施設				
76												YSB3	○	3間×3間 (4.64m×4.33m)	18.4	0.9	6.4	1.5	1.2~1.5	0.3~0.5	0.3	3.6~3.8	周開遺構と施設	22		
77												YSB4		1間×1間 (3.0m×2.4m)	7.2		3.07	2.47					周開遺構と施設			
78	78 1次調査	都城市中町	710	馬伏地南部	145	後期後半～終末期						SB4		2~4面 (2.02~2.05m×4.5m)			1.5~2.2	1.8~2.2	0.3~0.4	0.1~0.3		縦穴墓物に隣接	32			
79	79 30 2次調査	都城市中町	640									SB5		2間×1間 (5.4m×4.0m)	21.6			2.4~2.8	1.8~2.2	0.24~0.4	0.1~0.28		縦穴墓物のみ	21		
80												SB6		3間×1間 (4.0m×2.2m)	8.8			1.2~1.5	2.2	0.3~0.32	0.1~0.4					
81												SB7	○	2間×1間 (5.0m×4.0m)	20	0.6~1.1	6.5	2.3~2.72	4.0	0.24~0.36	0.08~0.2					
												SB8		2~4面 (2.02~2.05m×4.5m)			2.00	2.5~2.12	0.2~0.35	0.1~0.4		縦穴墓物のみ				

表1 弥生時代の掘立柱建物一覧（2）

大面積は八幡上遺跡の 26.6 m<sup>2</sup>、最小は諸麦遺跡の 0.6 m<sup>2</sup>。桁行と梁行の規模のグラフをみると、桁行 2m 以下のものは、面積を拡大するため梁行を伸長している。桁行 2 m を超えると梁行は大まかに 2 m から 3.0 m の範囲に移行し、桁行 4 m を超えると、梁行は 3.5 m ~ 4 m 程度に収まる。このことから、単純に建物の床面積拡大のため桁行・梁行を伸長するのではなく、桁行の長さに応じて梁行の長さをある程度決めている状況が窺える。これは、建築技術との関係もあるかもしれないが、建物の用途（役割）に応じて、それぞれ縦横の長さ（広さ）の使い分けが行われていたと想定され、何かしら共通の建築の目安（基準）のようなものを共有していた可能性もある<sup>(3)</sup>。棟持柱建物は、総数 31 棟確認され、総数 81 棟の 38 % と非常に高い割合を示している。その多くは中期後半から後期初頭に集中する<sup>(4)</sup>。

掘立柱建物は、面積および桁行・梁行の規模の分布から、桁行・梁行 2 m 以下、面積 4 m<sup>2</sup> 以下の建物（1 類）、桁行 2 m ~ 4.5 m、梁行 2 m ~ 3.5 m、面積 4 ~ 14 m<sup>2</sup> の建物（2 類）、桁行 4 m 以上、梁行 3.5 m 以上、面積 14 m<sup>2</sup> 以上の建物（3 類）、面積 25 m<sup>2</sup> を超える大型建物を 4 類と分類可能である<sup>(5)</sup>。

### （3）各時期の様相（表 5・6）

ここでは、掘立柱建物の大まかな変化をみていくことから、弥生時代中期後半から後期初頭を中期後半に、後期前半、後期後半から古墳時代初頭を後期後半という三つの区分でみていく<sup>(6)</sup>。

#### ・中期後半

13 遺跡 48 棟を対象とする。各時期を通して最も多く、そのうち棟持柱建物が 20 棟（全体の 43.8%）ある。平面形式では、桁行 1 間 ~ 5 間、梁行 1 ~ 4 間と様々な組み合わせの柱間を有する建物がみられる。そのうち 3 間 × 3 間、3 間 × 4 間が 25 棟と全体の 52% を占める。4 間 × 3 間以上の数は少ない。掘立柱建物の大きさは、1 類から 4 類までみられ、1 類 5 棟、2 類 22 棟、3 類 19 棟、4 類 2 棟となる。2・3 類が大半を占め、4 類の大型建物 3 棟のうち 2 棟がこの時期に入る。平面形式と面積をあわせてみてみると、1 間 × 1 間、1 間 × 2 間は 1 類になり、桁行 1 間から 4 間に 2 類が分布する。さらに、桁行 3 ~ 4 間、梁行 2 ~ 4 間の建物から 3 類が現れ、桁行 4 ~ 6 間、梁行 3 間の建物が 4 類となる。

次に遺跡ごとに掘立柱建物の 1 ~ 4 類の構成をみると、(1 類のみ 1 遺跡)、(2 類のみ 5 遺跡)、(3 類のみ 1 遺跡)、(2・3 類 2 遺跡)、(1・2・3 類 2 遺跡)、(2・3・4 類 2 遺跡) と、集落ごとに多様な建物構成を呈している。

棟持柱建物の平面形式は、1 間 × 1 間、2 間 × 1 間、3 間 × 1 間が各 1 棟ずつ、3 間 × 3 間、4 間 × 3 間が 9 棟ずつとなる。面積では 2 類、3 類、特に 3 類が多く、棟持柱建物を有する集落とそうでない集落に分かれ、前者は複数棟（建替もあるが）作られる場合が多い<sup>(7)</sup>。

#### ・後期前半

八幡上遺跡と西都原遺跡の 2 遺跡 5 棟と事例が少ない。掘立柱建物は 2 類 4 棟、4 類 1 棟で、1 類と 3 類はみられず、棟持柱建物も確認されていない。建物構成は、八幡上遺跡（2 類・4 類）、西都原遺跡（2 類のみ）となる。

平面形式では、中期後半にみられた梁行 3 間の建物は 2 棟と急激に減少し、あわせて桁行 1 間 ~ 2 間の建物のもほとんどみられなくなる。ただ、後期後半に 1 間 × 1 間、2 間 × 1 間の建物があることから、後期前半にも存在していると考えられる。3 間 × 3 間は、面積では、中期後半に比べ、大きく減少する。一方、八幡上遺跡では 6 間 × 3 間という最大規模の建物 4 類が引き続きみられ、2 間

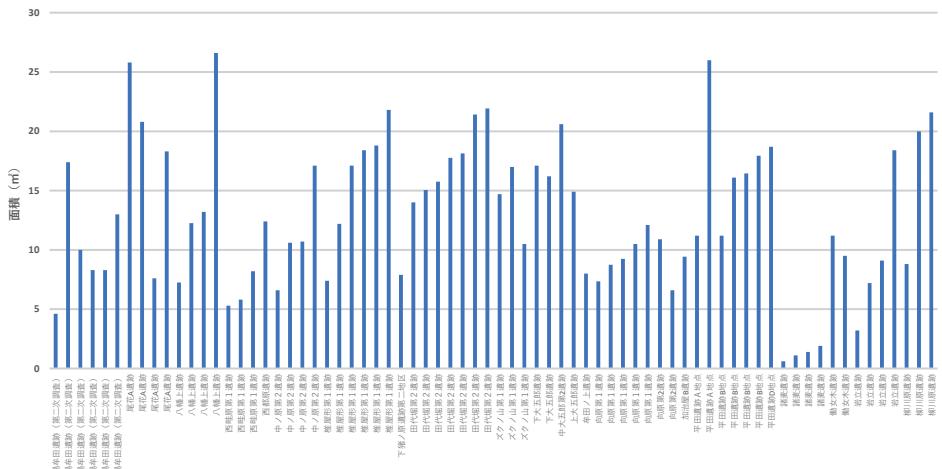


表2 掘立柱建物面積

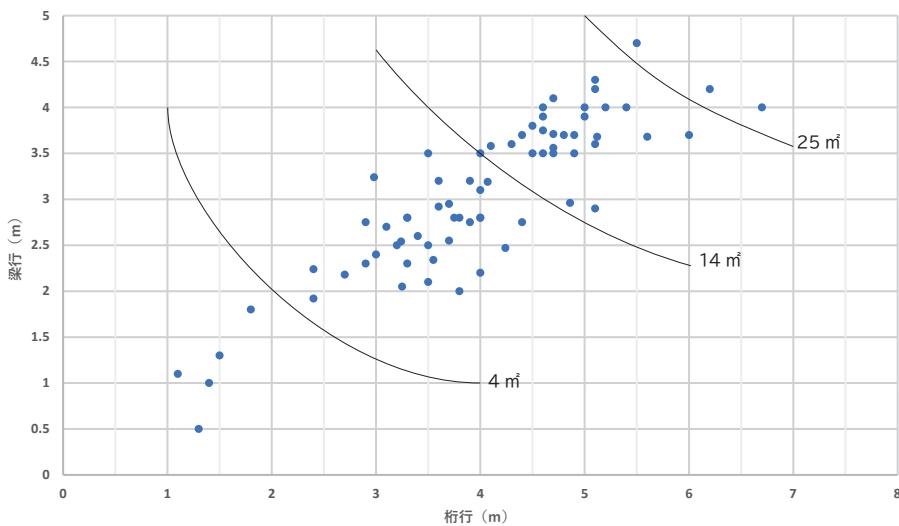


表3 掘立柱建物の規模

	1間×1間	1間×2間	2間×1間	2間×2間	3間×1間	3間×2間	3間×3間	4間×1間	4間×2間	4間×3間	4間×4間	5間×3間	6間×3間	総数
中期後半	8	3	9		1	2	13			10	1	1		48
面積最大	9.1	8.75	12.1		11.2	17.1	21.42			26	18.3	25.8		
最小	0.6	5.3	1.4		11.2	7.6	9.2			12.2	18.3	25.8		
平均	4.6	7.1	8.5		11.2	12.4	15.9			18.4	18.3	25.8		
後期前半				1			2	1					1	5
面積最大				7.25			12.4	13.2						26.6
最小				7.25			12.25	13.2						26.6
平均				7.25			12.3	13.2						26.6
後期後半	3		4	2	2		1			1				13
面積最大	10.9		20	21.6	20.6		11.2			17.4				
最小	4.61		8	6.6	8.8		11.2			17.4				
平均	8.5		11.2	14.1	14.7		11.2			17.4				
不確定	0	0	0	0	0	0	2		1	3	0	0	0	6
面積最大							16.2			17.1				
最小							10.5			14.7				
平均							13.4			12.6				
総数	11	3	13	3	3	2	18	1	1	14	1	1	1	72
面積最大	10.9	8.75	20.0	21.6	20.6	17.1	18.7	13.2	14.9	26.0	18.3	25.8	26.6	
最小	0.6	5.3	1.4	6.6	8.8	7.6	9.5	13.2	14.9	12.2	18.3	25.8	26.6	
平均	5.7	7.1	9.3	11.8	13.5	12.4	14.9	13.2	14.9	17.8	18.3	25.8	26.6	

表4 掘立柱建物の時期別・規模別面積

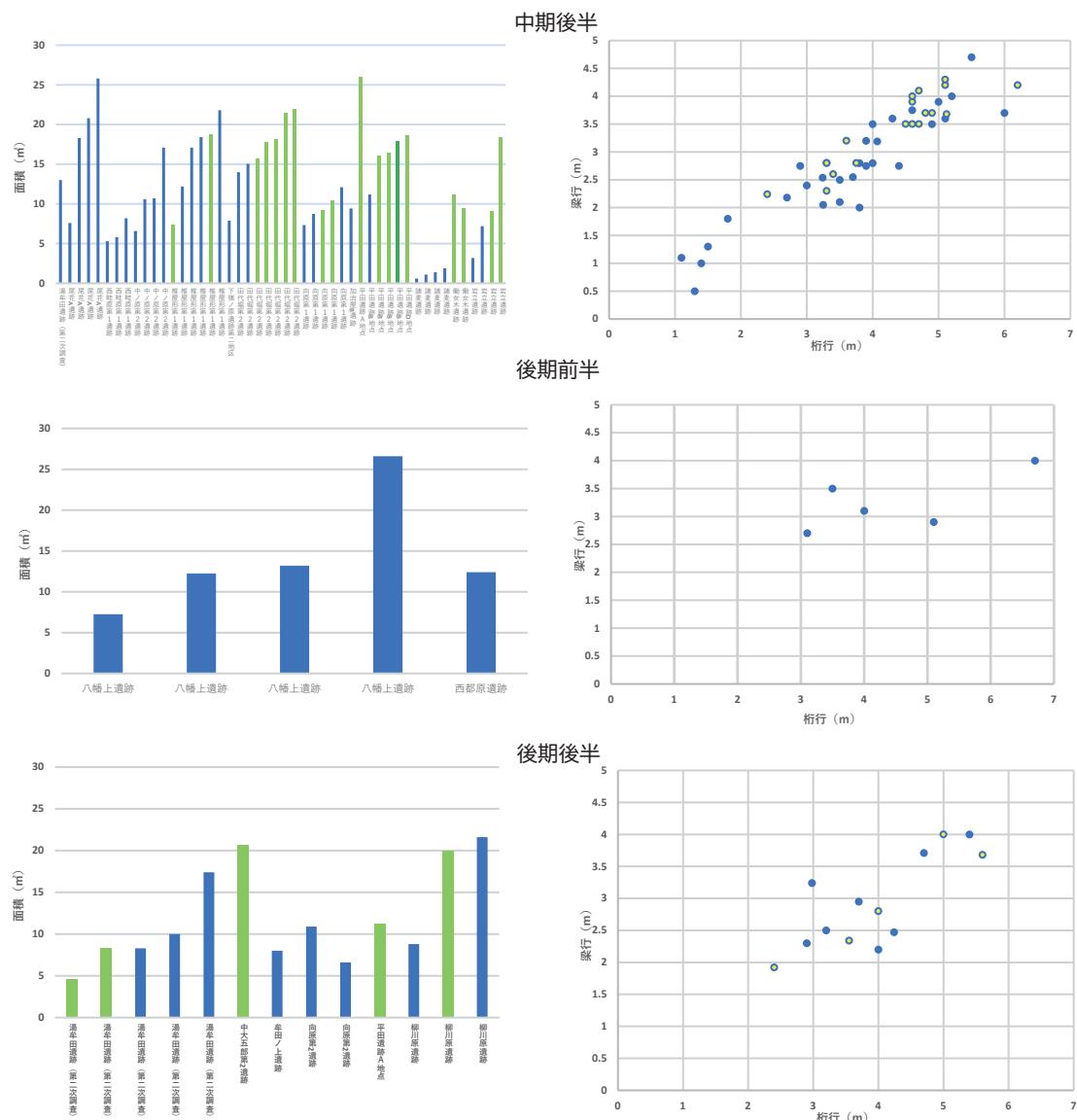


表5 各時期掘立柱建物の面積と規模

■は棟持柱建物

	1間×1間	1間×2間	2間×1間	2間×2間	3間×1間	3間×2間	3間×3間	4間×1間	4間×2間	4間×3間	4間×4間	間×3間	6間×3間	総数
中期後半	8	3	9		1	2	13			10	1	1		48
1類	4		1											5
2類	4	3	8		1	1	3			1				21
3類					1	10				8	1			20
4類										1		1		2
後期前半				1		2	1						1	5
1類														0
2類				1		2	1							4
3類														0
4類													1	1
後期後半	3		4	2	2		1			1				13
1類														0
2類	3		3	1	1		1							9
3類			1	1	1					1				4
4類														0
不確定	0	0	0	0	0	0	2		1	3	0	0	0	6
1類														0
2類								1						1
3類							1		1	3				5
4類														0
総数	11	3	13	3	3	2	18	1	1	14	1	1	1	72

表6 各時期掘立柱建物の時期別・規模別総数 (1~4類)

× 2 間や 4 間× 1 間、庇を有する建物が新たに出現する<sup>(8)</sup>。

・後期後半

6 遺跡 13 棟（棟持柱建物 5 棟（全体の 38.5%）を含む）を対象とする。後半に急増する弥生集落の状況<sup>(9)</sup>からすると、この数字は極端に少ない。掘立柱建物は 2 類 9 棟および 3 類 4 棟のみで、建物構成も 2 類と 3 類からなる。2 類の多くは 10 m<sup>2</sup>前後の建物となり、2 類の小型化（面積の縮小）が窺える。棟持柱建物についても、検出された掘立柱建物に占める割合は中期後半と比較して大きくは変わらないが、5 m<sup>2</sup>以下のものや大きくて 20 m<sup>2</sup>を僅かに越える程度に収まり、全体的に縮小傾向にある。

平面形式では、2 間× 1 間、2 間× 1 間、2 間× 2 間、3 間× 1 間、3 間× 3 間の建物は、それぞれ面積の増減はみられるが、継続して建てられている。一方、桁行 4 間以上の建物は、1 棟とほとんど姿を消す。さらに、20 m<sup>2</sup>を超える建物は、中期後半の梁行 3 間の建物から、桁行 2 ~ 3 間、梁行 1 ~ 2 間の建物に移行する。

（4）掘立柱建物について（図 1・2）

宮崎県の掘立柱建物の上屋構造についてはよくわからない。そのなかで、向原第 1 遺跡 SB3、岩立遺跡 YSB2、西畠原第 1 遺跡 SB4・5、諸麦遺跡 SB1 ~ 4 など 1 間× 1 間、1 間× 2 間の 11 棟が、四隅の柱穴が深く掘り込まれており高床建築の可能性がある<sup>(10)</sup>。1 間× 2 間、1 間× 1 間の建物の大半が該当するが、向原第 2 遺跡 SB1 では、建物内に硬化面が確認され、平屋建築と考えられる例もある。

そのほか、尾花 A 遺跡 2-S3502 では 1 力所、椎屋形第 1 遺跡 SB1 では 2 力所、建物内に柱穴が確認され、建物の梁行が 1 ないし 2 間であることから、屋内棟持柱とされる柱穴の可能性が高い（設楽 2009-p70）が、宮本のいう大型建物には該当せず、今後検討が必要である。（宮本 1996-pp.186 ~ 191）。

棟持柱建物の棟持柱は棟木を支える役割を有するが、その柱穴の位置は、梁のラインから両側 0.5 ~ 1.0 m ほど離れ、棟持柱間の距離は 4.1 ~ 7.8m を測る。最長の 7.8 m の建物は、中期後半の平田遺跡 A 地区 SB05 で、梁のラインからの長さ 1.0 m、面積は 26.0 m<sup>2</sup>と最大である。最少の 4.1 m は後期後半の湯牟田遺跡 SB3 で、梁のラインからの長さ 0.8 ~ 0.9 m、面積 6.1 m<sup>2</sup>である。このように棟持柱の梁のラインからの長さに大きな変化はみられず、建物本体が縮小している。棟木を支える棟持柱の柱穴の断面は、浅く真っ直ぐなものが多いが、働く木遺跡 2 号掘立柱建物と岩立遺跡 YSB3 の 2 棟の柱穴断面は深く梁行方向に傾く。上屋構造のより太い棟木を支えるためのものか。そのほか、上屋構造と関わりがあるかどうかは不明だが、椎屋形第 1 遺跡の柱穴の平面形は、ほとんどが方形をなしている<sup>(11)</sup>。

掘立柱建物の機能については、住居や倉庫などの収納施設、儀礼および祭祀の施設など想定されるが、現状の資料で上屋構造と同様、検証は困難である。上述した高床建築の可能性のある建物は、面積も狭く倉庫などの機能が想定される。中須遺跡では、石器や木器の未製品などが多量に出土し、溝状遺構では加工前の木材貯蔵も確認されていることなどから、様々な生活用具の製作が行われていたと考えられ、調査区内で確認された「周溝状遺構や掘立柱建物は生産に関わる素材や用具などの物資を保存、保管するなどの機能をもった施設であった可能性」（宮崎市教育委員会 2015）を指摘している。そのほか、椎屋形第 1 遺跡の東妻側にコの字の溝が巡る SB6 も集落内での掘立柱建物の機能・性格を考えるうえで重要な事例である。

棟持柱建物は、その多くが3類・4類に分類され、その特殊性は認められるものの、中期後半の多くの遺跡で存在することや棟持柱建物を有する集落とそうでない集落の間に、遺構や出土遺物など明確な優位性、格差などは認められない。集落内での特別な共有施設という意味合いが強いのではないか。また、向原第1遺跡の周溝状遺構（SC2・SC4）内に建てられた棟持柱建物は、平田遺跡A地点の周溝状遺構から多量の土器とともに炭化米が出土した（都城市教育委員会2008）事例を参考にすれば、短絡的ではあるがコメの収納・管理および稻作に関する儀礼祭祀の機能を想起させる。

#### （5）掘立柱建物の位置関係（第3～7図）

掘立柱建物は、竪穴建物や土坑、周溝状遺構などとともに検出されるが、その位置関係は様々である。その中で特徴的なものを紹介する。まず、竪穴建物などと混在する事例である。竪穴建物が分布するなかに掘立柱建物が配置される。西畠原第1遺跡や諸麦遺跡などがあげられる。湯牟田遺跡や（調査区が限られ明確ではないが）向原第1遺跡・向原第2遺跡では、数基の竪穴建物等のまとまりに、1～2棟の掘立柱建物が伴う状況も窺える。そのなかで、椎屋形第1遺跡では、円形の大型竪穴建物の周囲に棟持柱建物が棟筋をそろえて近接して並列され、さらにその外側に小型の竪穴建物が建てられるなど、複数の建物の規格的配置として注目される<sup>(12)</sup>。

次に竪穴建物などのまとまりとは離れて、掘立柱建物が建てられる事例で、八幡上遺跡や働く木遺跡がある。八幡上遺跡では、片側に庇をもち26m<sup>2</sup>を超える大型建物が竪穴建物と離れ単独で存在する。ただ、この類例とするには、県内では確認される竪穴建物が散漫な分布をすることから、調査範囲に左右される可能性も高く、その判断は難しい。

3例目は、掘立柱建物がまとまって配置される例である。尾花A遺跡、田代堀第2遺跡、中須遺跡がある。尾花A遺跡では、建物が軒先を平行に並び、田代堀第2遺跡は、7棟の建物がまとまりある程度主軸を揃えて建てられている。中須遺跡では複数の周溝状遺構に隣接して3棟が並列に配置されている。また、柳川原遺跡でも掘立柱建物のみ検出されているが、建物がまとまらず、調査区外に竪穴建物が存在する可能性もあることから保留にしておきたい。

時期的には、1例目、2例目は中期後半から後期後半までみられ、3例目は中期後半に限られる。これは1・2例目が掘立柱建物を有する集落の一般的な様相で、3例目は特別な状況とみれる。掘立柱建物がまとまって建てられる理由については今後の課題である。

### 3 おわりに

今回の集成は、宮崎県内の弥生時代掘立柱建物の様相を知ることを目的としたものである。集成の結果、掘立柱建物のピークが建物出現期の中期後半にあること、様々な平面形式が採用されるなか、梁行3間の建物が多く見られること、後期後半には、平面形式が小規模なものにまとまり小型化の傾向があることなどがわかつってきた。さらに、桁行長さに伴う梁行の固定化の可能性があることから、建物の規模によって、その役割、用途の違いも想定され、集落における掘立柱建物の位置（配置）においても、いくつかの事例を確認できた。このように、掘立柱建物に注目してみると、前期から中期前半の様子が不明な部分も多いが、中期後半に大きな画期がおとずれていたことが垣間見えてきた。しかしながら、掘立柱建物のピークとなる中期後半の集落では、1類のみで構成される遺跡や複数の大きさの建物で構成される遺跡に分かれ、棟持柱建物をもつ遺跡とそうでない遺跡も存在する。さらに、弥生後期後半に急増する弥生集落において、掘立柱建物を有する遺跡が極端に少なくなる理由は、中期後半に求められていた建物の機能あるいは性格が変化したこと示している

のであろうか。このように、十分な掘り下げができず、様々な課題が残されている。今後、正確な遺構の時期の判別とともに各遺跡の分析を進め、掘立柱建物を有する集落とそうでない集落についての検討も行っていきたい。

最後に、弥生時代の掘立柱建物には、小規模なものも含め様々な平面形式があり、建物の認定や時期比定など困難な点も多く、発掘調査時の検証が非常に重要である。今回の集成が、今後の発掘調査における弥生時代の掘立柱建物の確認の手助けとなり、弥生時代研究に貴重な基礎資料が提供されることを期待したい。

### 【註】

- (1) 隣県である鹿児島県では、8遺跡 81 棟が確認され、そのすべてが中期後半とされている（湯場崎 2019）。
- (2) 報告書において、柱穴の埋土が他の弥生時代遺構の埋土との類似や竪穴建物の主軸との関係、弥生時代遺構との重複関係などから弥生時代の建物として可能性を含め記載されているものを取り上げた。
- (3) 山下優介は、古墳時代の棟持柱建物の桁行・梁行の規模から「梁行がある程度固定された数値の間に分布する」とし、「梁行に関する共通の基準により築かれた」と考えている（山下 2015-pp.31～35）。
- (4) 宮本長二郎は、「妻側柱筋から大きくはなれた位置に棟持柱を立てる独立棟持柱遺構」と、「妻側中央柱が柱筋に接するかあるいは柱1～2本分外側に離れて棟持柱を立てる近接棟持柱建物遺構」とに区別している。さらに、近接棟持柱は、「平地式・高床式に関わらず妻側中央壁面に近接して立てるこにより棟木を支持し、切妻屋根を固定する構造的な機能を重視した工法」としている（宮本 1996-pp.182～186）。本稿では、両者の違いを明確に分けることが困難なため、梁行ラインから外側に位置する柱穴を有する建物を棟持柱建物として取り扱う。
- (5) 岸本道昭は、桁行と梁行の関係から、桁行 6m、面積 25 m<sup>2</sup>を境に A 類、B 類に分け、B 類より大型の建物を C 類としている。本稿では、桁行に違いはあるが、1～3 類が A 類に、4 類が B 類に区分される（岸本 1998-pp.80～82）。  
また、設楽博己は 棟持柱建物を、20 m<sup>2</sup>以下を小型、20～50 m<sup>2</sup>を中型、50 m<sup>2</sup>以上を大型としている（設楽 2009-pp.71～72）。
- (6) 弥生土器の編年は、松永幸寿、河野裕二、近沢恒典らにより詳細な時期区分が行われており、本稿で区分する後期後半とする遺跡は、古墳時代前期後半まで下る可能性のものもあるが、本稿では、大まかな掘立柱建物の変遷をみるため、報告書の記載時期をそのまま採用している（松永 2001・河野 2017・近沢 2017）。
- (7) 設楽博己は、棟持柱建物について「本州地方は、梁間は1ないし2間に限られるが、九州・四国地方では梁間3間の建物が主流をなす」とされる（設楽 2009-p.70）。
- 山下優介は、九州の棟持柱建物の特徴として、「中期後葉から後期初頭に多い」、「梁間3間となる事例が多い」、「1遺跡から複数棟の棟持柱建物が検出」をあげている。
- (8) 八幡上遺跡2号掘立柱建物は、庇の出が1m未満と狭く桁行の補強用の柱の可能性もある。庇は弥生時代中期には出現している（宮本 1996-pp.191～193）。
- (9) 県内で弥生終末期から古墳時代前期の集落が95遺跡で確認されている（河野・加賀 2018）。
- (10) 宮本長二郎は、「弥生～古墳時代を通して、梁行1間の掘立柱建物が高床建築であった可能性が非常に高い」とされる（宮本 1996-p.164）。また、鹿児島県王子遺跡の4棟の棟持柱建物は平屋建築としている（宮本 1996-pp.182～183）。
- (11) 武末純一は、弥生時代前期の掘立柱建物において、「柱穴に方形のものや二段掘のものが見られる点」に注目している（武末 1991）。
- (12) 河野裕次は、椎屋形第1遺跡について「居住域と墓域が比較的近接して営まれるという関係性を想定する事例」としている。

### 参考文献

- 1 えびの市教育委員会 1991『広畠遺跡』えびの市埋蔵文化財調査報告書第7集
- 2 河野裕次 2015「宮崎平野部における弥生集落の様相」『Archaeology From the South III 本田道輝

- 先生退職記念論文集』本田道輝先生退職記念事業会、87～99頁
- 3 河野裕次 2017「宮崎県の様相－宮崎平野暗部を中心に－」『九州島における古式土師器』第19回九州前方後円墳研究会 長崎大会発表要旨集・基本資料集、234～253頁
- 4 河野裕次・加賀淳一 2018「宮崎県の様相－集落と古墳の動態について－」『古墳と集落の動態Ⅰ－弥生時代終末期～古墳時代前期－』第21回九州前方後円墳研究会鹿児島大会発表要旨集、317～342頁
- 5 岸本道昭 1998「掘立柱建物からみた弥生集落と首長－兵庫県と周辺の事例から－」『考古学研究』第44巻第4号、79～91頁
- 6 清武町教育委員会 1993『角上原遺跡群Ⅱ 田代堀第2遺跡 田代堀遺跡』清武町埋蔵文化財調査報告書第4集
- 7 西都市教育委員会 2006『西都原遺跡』西都市埋蔵文化財調査報告書第45集
- 8 設楽博己 2009『独立棟持柱建物と祖靈祭祀』国立歴史民俗博物館研究報告第149集
- 9 新富町教育委員会 1992『七又木地区遺跡 八幡上遺跡 七又木遺跡 銀代ヶ迫遺跡』新富町文化財調査報告書第13集
- 10 武末純一 1991「九州の掘立柱建物Ⅰ」『弥生時代の掘立柱建物』埋蔵文化財研究会第29回研究集会実行委員会、117～126頁
- 11 田野町教育委員会 2000『高野原遺跡B・C地区(1)(掘立柱建物図面・図版編)』田野町文化財調査報告書第35集
- 12 田野町教育委員会 2003『高野原遺跡B・C地区(3)(弥生時代の調査)』田野町文化財調査報告書第46集
- 13 田野町教育委員会 2003『鹿村野地区遺跡』田野町文化財調査報告書第47集
- 14 近沢恒典 2017「都城盆地における古墳時代の土器について」『会報』8、放送大学大学院歴史研究会、1～41頁
- 15 埋蔵文化財研究会第29回研究集会実行委員会 1991『弥生時代の掘立柱建物』
- 16 松永幸寿氏 2001「宮崎平野部における弥生時代後期中葉～古墳時代中期の土器編年」『宮崎考古』第17号 宮崎考古学会、1～39頁
- 17 都城市教育委員会 1990『遺跡発掘調査報告書 久玉遺跡(第2次調査) 野々美谷城跡 向原第1・2遺跡 竹山・胡麻ヶ野地区試掘調査』都城市文化財調査報告書第11集
- 18 都城市教育委員会 1991『遺跡発掘調査概報 都之城跡(主郭部) 久玉遺跡(第3次調査) 宮ノ下遺跡 堂山(南地区) 遺跡 牟田ノ上遺跡 屏風谷第1遺跡 都城市内出土遺物補遺(築池地下式横穴墓)』都城市文化財調査報告書第13集
- 19 都城市教育委員会 1995『丸谷地区遺跡群 上大五郎遺跡』都城市文化財調査報告書第31集
- 20 都城市教育委員会 1996『中大五郎第1遺跡 中大五郎第2遺跡 本池遺跡 前畠遺跡』都城市文化財調査報告書第34集
- 21 都城市教育委員会 1998『中央東部地区遺跡群 柳川原遺跡(第1～3次調査) 中町遺跡(第1・2次調査)』都城市文化財調査報告書第43集
- 22 都城市 2006『都城市 資料編 考古』
- 23 都城市教育委員会 2007『加治屋B遺跡(縄文時代・弥生時代編)』都城市文化財調査報告書第81集
- 24 都城市教育委員会 2008『平田遺跡A地点・B地点・C地点』都城市文化財調査報告書第87集
- 25 宮崎県埋蔵文化財センター 2004『西畠原第1遺跡 西畠原第2遺跡D区(鬼界アカホヤ火山灰層上面)』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第82集
- 26 宮崎県埋蔵文化財センター 2005「下大五郎・谷ノ口遺跡・渡り口遺跡・下川原遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第113集
- 27 宮崎県埋蔵文化財センター 2007『湯牟田遺跡(二次調査)』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第152集
- 28 宮崎県埋蔵文化財センター 2007『平田遺跡(D地点・E地点)』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第160集

- 29 宮崎県埋蔵文化財センター 2008『諸麦遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 168 集
- 30 宮崎県埋蔵文化財センター 2011『富吉前田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 209 集
- 31 宮崎県埋蔵文化財センター 2011『尾花遺跡Ⅱ 弥生時代以降編』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 195 集
- 32 宮崎県埋蔵文化財センター 2011『働く木遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 205 集
- 33 宮崎市教育委員会 1996『椎屋形第 1 遺跡・椎屋形第 2 遺跡・上の原遺跡』
- 34 宮崎市教育委員会 2011『下猪ノ原遺跡第二地区』宮崎市埋蔵文化財調査報告書 83 集
- 35 宮崎市教育委員会 2015『中須遺跡』宮崎市文化財調査報告書第 102 集宮崎市教育委員会
- 36 宮崎市教育委員会 2021『中ノ原第 2 遺跡』宮崎市文化財調査報告書第 138 集
- 37 宮本長二郎 1996『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版
- 38 山下優介 2015「弥生・古墳時代の独立掘立柱建物に関する考察」『先史学・考古学研究』第 26 号、筑波大学、23~47頁
- 39 湯場崎辰巳 2019「鹿児島県における弥生時代の掘立柱建物跡の基礎的研究－県本土の掘立柱建物跡の集成と考察－」『縄文の森から』第 11 号、鹿児島県立埋蔵文化財センター、67~76頁

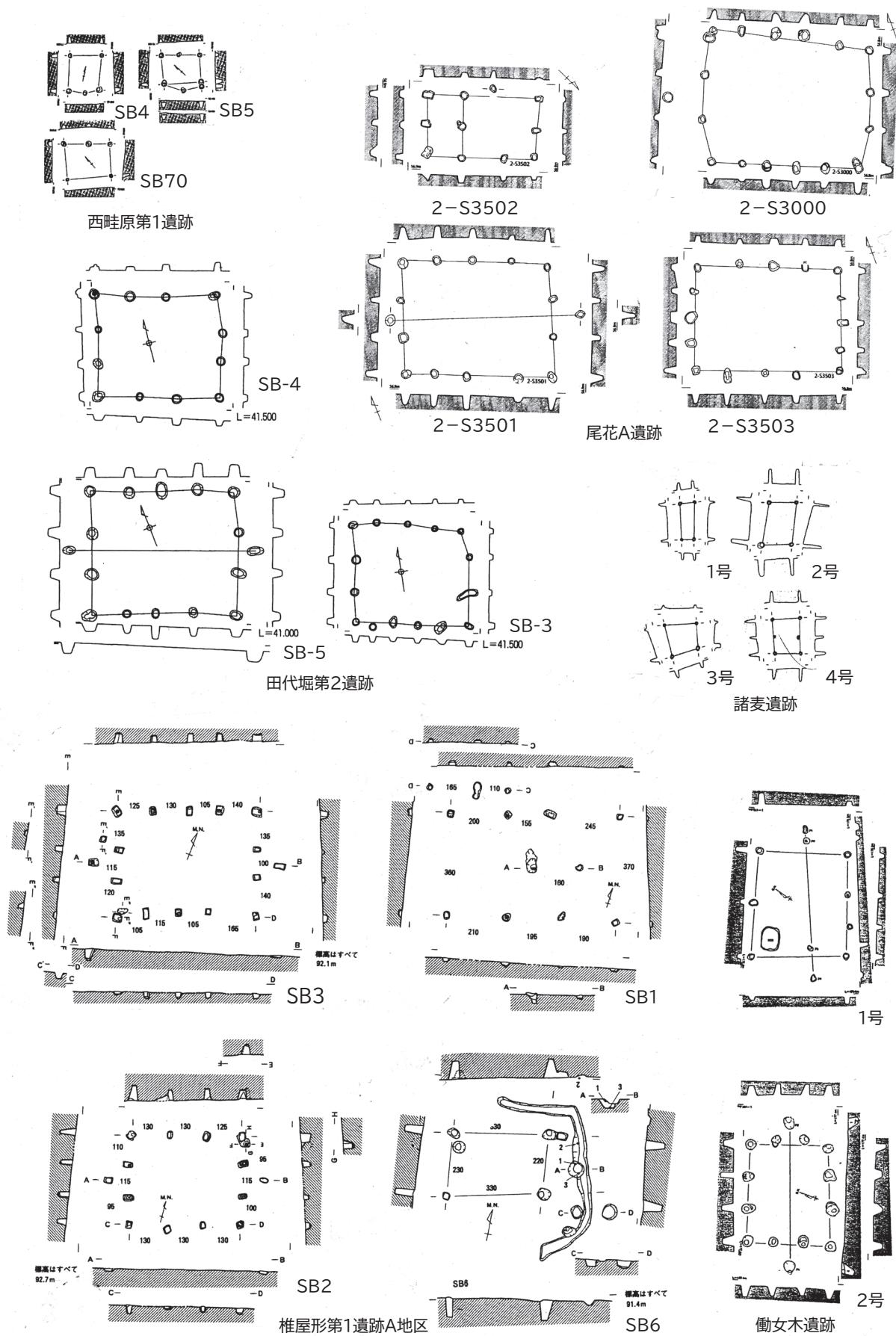


図1 弥生時代掘立柱建物実測図(1)(1/200)(※図は各報告書より転載)

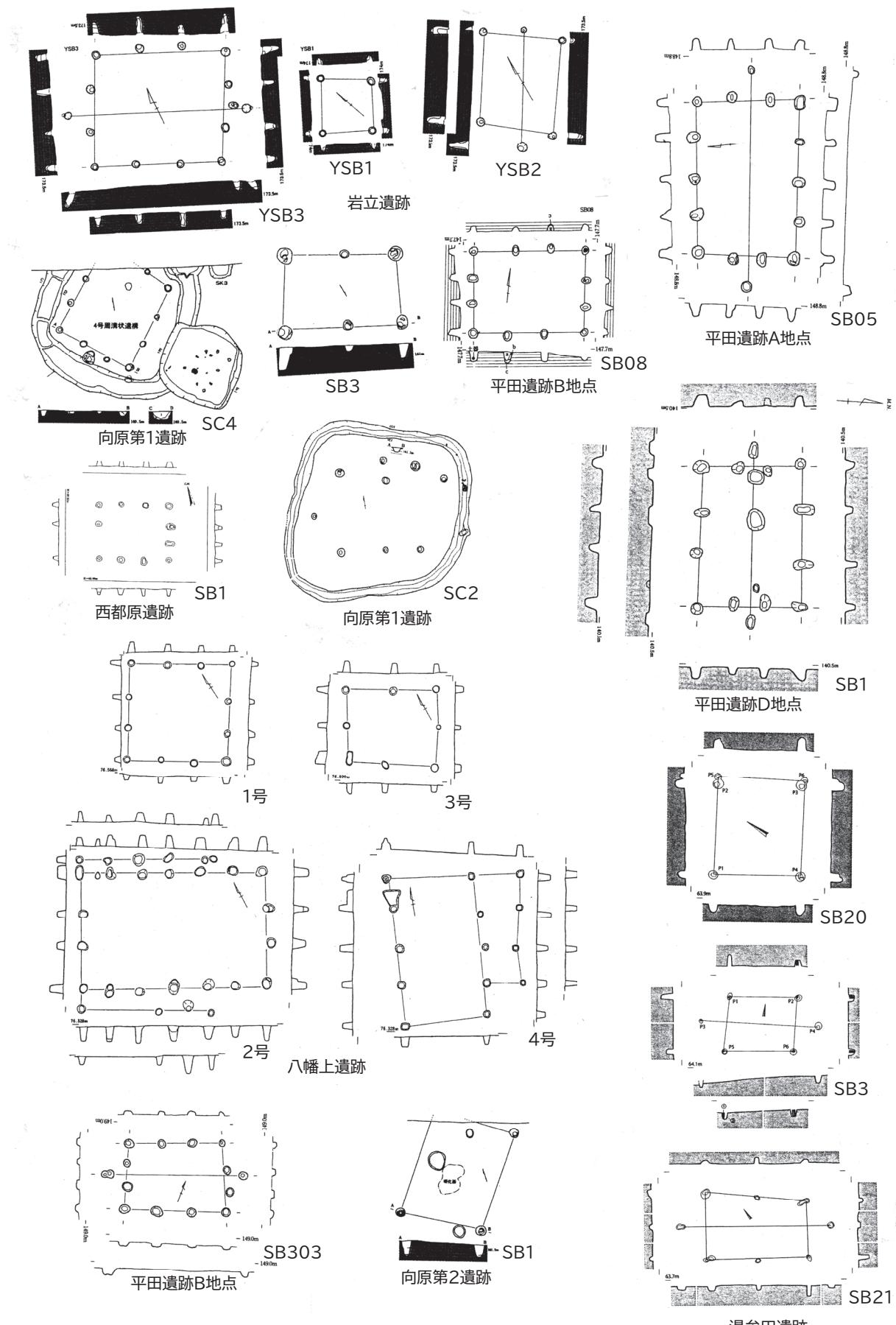


図2 弥生時代掘立柱建物実測図（2）(1/200)（※図は各報告書より転載）

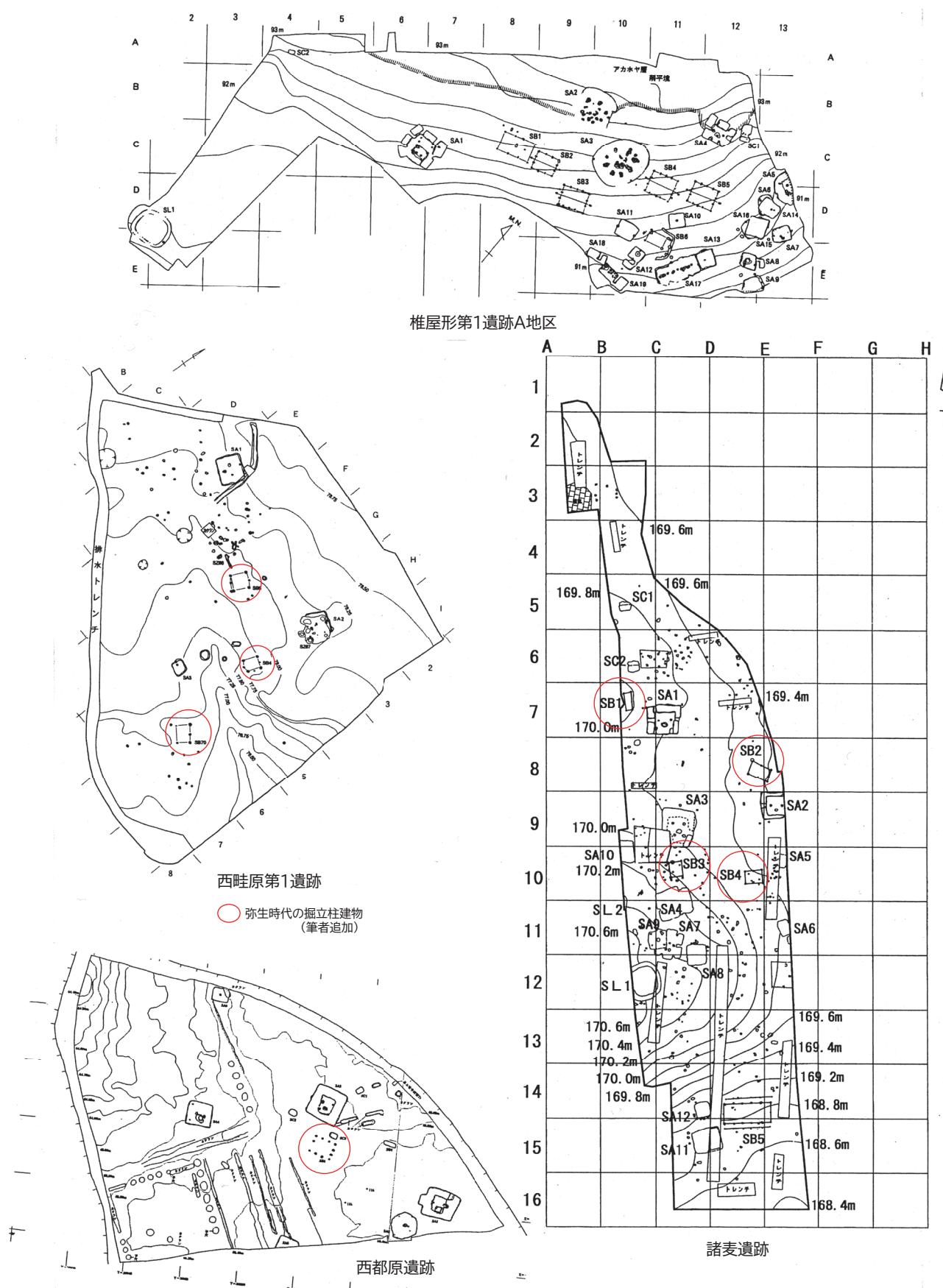


図3 弥生時代遺跡遺構分布図(1) (1/1000) (※図は各報告書より転載)

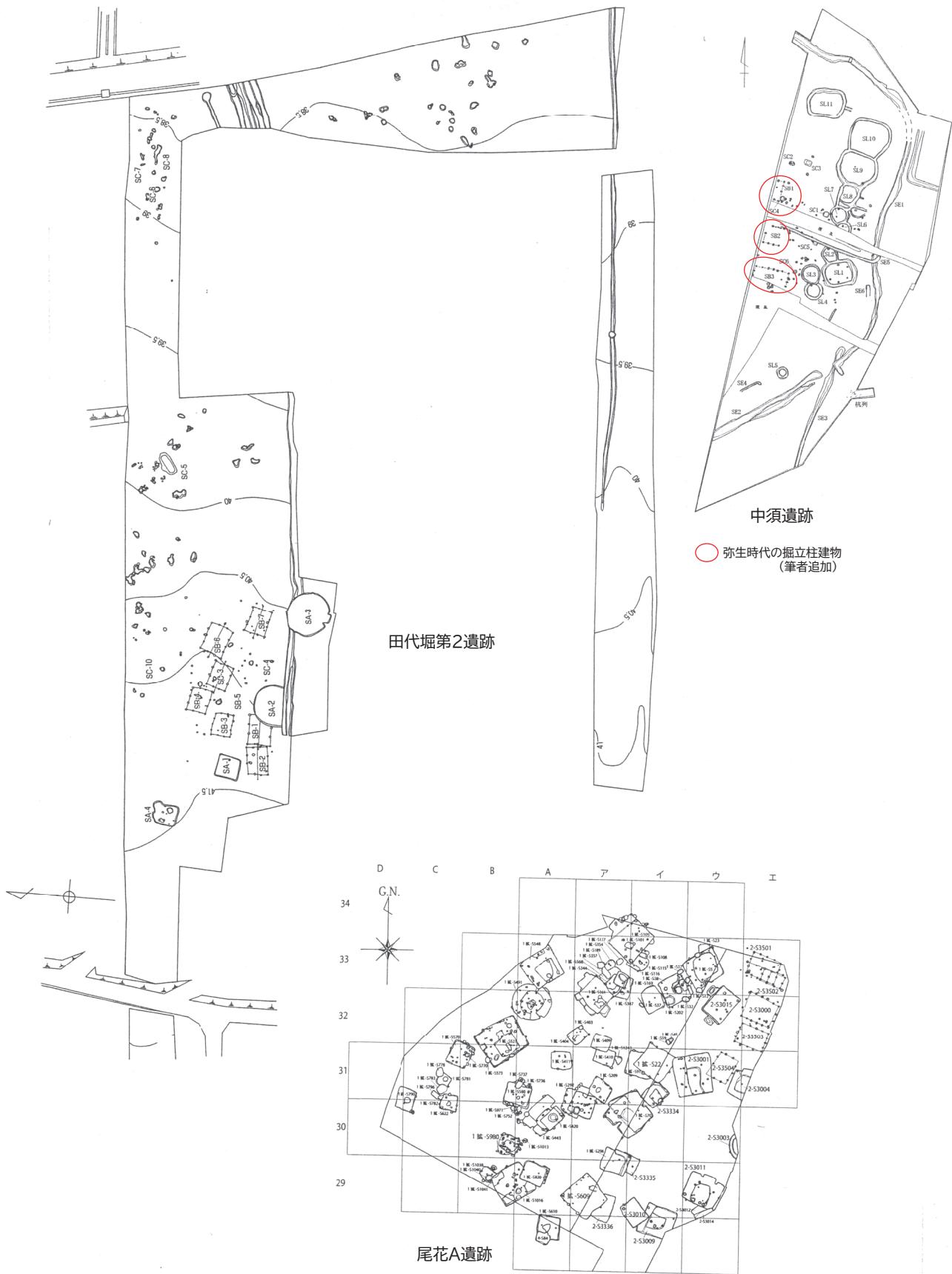


図4 弥生時代遺跡遺構分布図（2）（1/1000）（※図は各報告書より転載）

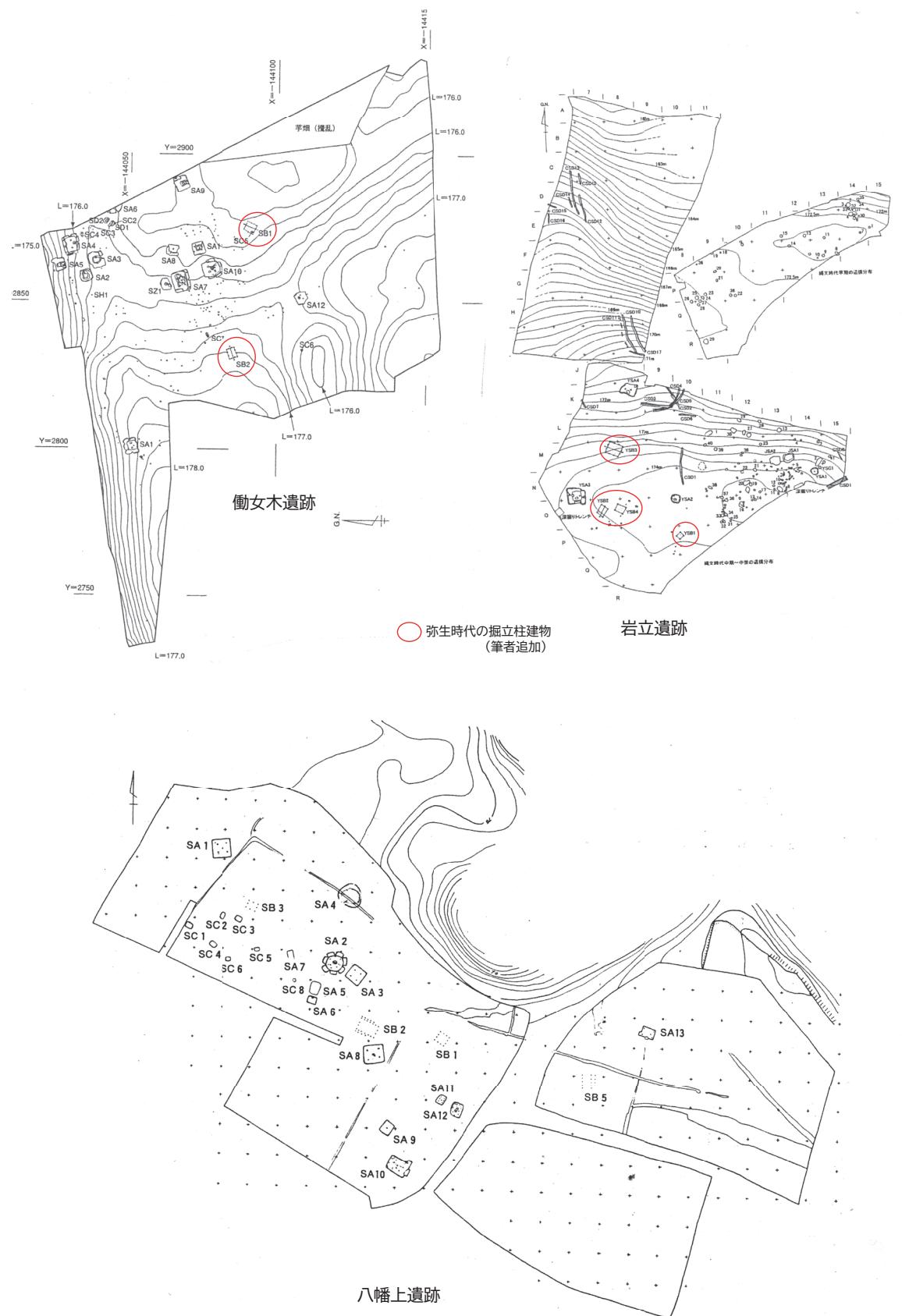


図5 弥生時代遺跡遺構分布図(3) (1/2000) (※図は各報告書より転載)

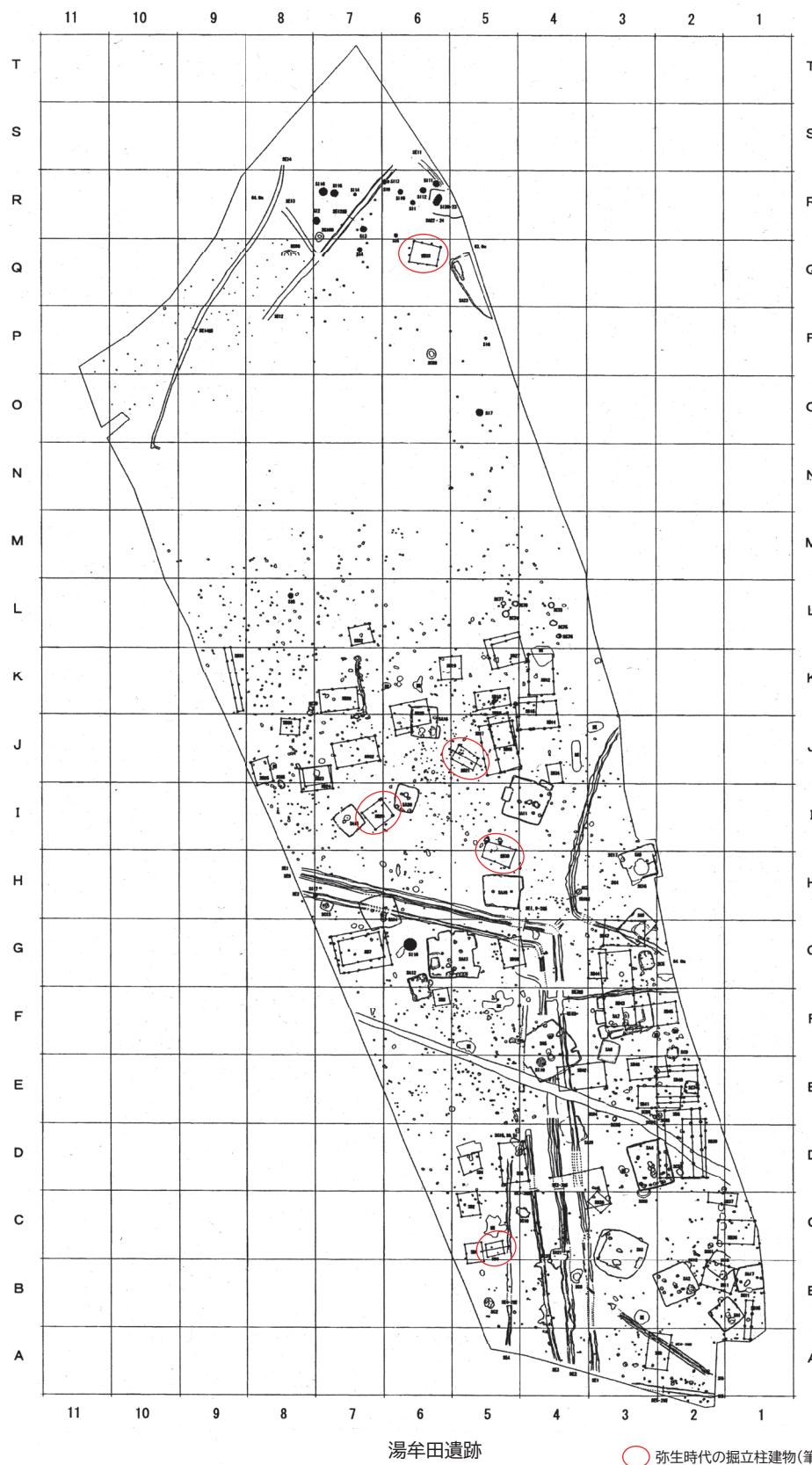


図6 弥生時代遺跡遺構分布図(4)(1/1000)(※図は各報告書より転載)



図7 向原遺跡地形図 (1/5000) 及び遺構分布図 (1/4000) (※図は各報告書より転載)